

うらむらさき

樋口一葉

青空文庫

上

ゆふぐれ 夕暮の店先に郵便脚夫が投込んで行きし女文字の書状一通、炬燵の間の洋
 燈のかけに讀んで、くるくると帯の間へ巻收むれば起居に心の配られて物案じなる事一
 としほ 通りならず、おのづと色に見えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝ
 るに、いえ、格別の事でも御座りますまいけれど、仲町の姉が何やら心配の事が有
 るほどに、此方から行けば宜いのなれど、やかましやの良人が暇といふては毛筋ほども明
 けさせて呉れぬ五月蠅さ、夜分なりと歸りは此方から送らせうほどにお良人に願ふて鳥
 渡來て呉れられまいか、待つて居る、と云ふ文面で御座ります、又まゝ娘と紛紜でも起
 りましたのか、氣の狭い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を痛くするが彼の人
 の性分、困りもので御座ります、とて態どの高笑ひをして聞かせれば、はて扱氣の
 毒など太い眉を寄せて、お前にすればたつた一人の同胞、善惡ともに分けて聞かぬ
 ばならぬ役を笑ひ事にしては置かれまい、何事の相談か行つて様子を見たらば宜から
 う、女は氣の狭いもの、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるであらうを、お

まへおこた
前の懈りを私の故に取られて恨まれても徳の行かぬ事、夜は格別の用も無し、早く行つて聽いて遣るがよからう、と可愛き妻が姉の事なれば、優しき許しの願はずして出るに、飛立つほど嬉しいを此方は態と色にも見せず、では行きませうかと不勝々々に箆筒へ手を懸れば、不實な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知れはせぬぞ、と知らぬ事なれば、佛性の旦那どの急ぎ立つるに、心の鬼やおのづと面ぼてりして、胸には動悸の波たかゝり。

いとおり
糸織の小袖を重ねて、縮緬の羽織にお高祖頭巾、脊の高き人なれば夜風を厭ふ角でぐわいとう
袖外套のうつり能く、では行つて來ますると店口に駒下駄直させながら、太吉、太吉と小僧の脊を人さし指の先に突いて、お舟こぐ眞似に精の出で店の品をばちよろまかされぬやうにしてお呉れ、私の歸りが遅いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るならいつでも床の中へ入れて置いては成らないぞえ、さんは臺所の火のもとを心づけて、旦那のお枕もとへは例の通りお湯わかしにお烟草盆、忘れぬやうにして御不自由させますな、成るだけ早くは歸らうけれど、と硝子戸に手をかくれば、旦那どの聲をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘たるき言葉、何の商人の女房が店から車に乗出すは榮耀の沙汰で御座ります、其處らの角から能いほどに直切つて乗つ

て参りましよ、これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい聲にて笑へば、世帯じ
 みた事をと旦那どのが恐悦顔、見ぬやうにして妻は表へ立出でしが大空を見上げて
 ほつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいとゞ雲深う成りぬ。
 何處の姉様からお手紙が来やうぞ、眞赤な嘘をと我家の見返られて、何事も御存じ
 なしによいお顔をして暇を下さる勿躰なさ、あのやうな毒の無い、物疑ひといふて
 は露ほどもお持ちなさらぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸に欺しつけて心の
 まゝの不義放埒、これがまあ人の女房の所業であらうか、何といふ悪者の、人で
 なしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生のやうな心であらう、此様ないたづらの畜
 生をば、御存じの無い事とて天にも地にも無いかのやうに可愛がつて下すつて、私が事
 と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる御思召有難い嬉しい恐ろ
 しい、餘りの勿躰なさに涙がこぼれる、あのやうな良人を持つ身身の何が不足で劔の刃渡
 りするやうな危険い計較をするのやら、可愛さうにあの人の好い仲町の姉さんまでを引
 合ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまあ何處へ向く、思へば私は悪黨人でなし、
 いたづら者の不義者の、まあ何といふ心得違ひ、と辻に立つて歩みも得やらず、横
 町の角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはらくとこぼれぬ。

良人の名は、小松原東二郎、西洋小間物の店は名ばかりに、有あまる身代を藏の中に寐かして、さりとは當世の算用知らぬ人よし男に、戀女房のお律が手ばしこさ
 おくおもてひらつても、美しくいい眺に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元から
 お客様への世辭も出る、年もねつから行きなさらぬにお伶俐なお内儀さまと見るほど
 の人褒め物の、此人自身が裏道の働き、人は知らじと自ら晦ませども、優しき良人が
 心ざし生憎纏はる心地してお律は路傍に立すくみしまゝ、行くまいか行くまいか、寧思
 ひ切つて行くまいか、今日までの罪は今日までの罪、今から私が氣さへ改めれば、彼のお
 人とてさのみ未練は仰しやるまじく、お互ひに浅い交際をして人知らぬうちに汚れを雪
 いで仕舞つたなら、今から後のあの方の爲、私の爲、生中こがれて附纏ふたとて、晴
 れて添はれる中ではなし、可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に知れたら何と
 せう、私は兎も角あの方はこれからの御出世前、一生を暗黒にさせましてそれで私
 は満足に思はれやうか、お、厭な事恐ろしい、何と思ふて私は逢ひに出て来たか、よし
 やお文が千通來やうと行さへせねばお互ひ疵には成るまいもの、もう思ひ切つて歸りま
 せう、歸りませう、歸りませう、歸りませう、え、もう私は思ひ切つたと路引違へて駒
 下駄を返せば、生憎夜風の身に寒く、夢のやうなる考へ又もやふつと吹破られて、ええ

私わたしは其そのやうな心こゝろ弱よわい事ことに引ひかれてならうか、最さい初しよあの家うちに嫁よめ入いる時ときから、東とうじ
 二郎らうどのを良を人と定さだめて行いつたのでは無ないものを、形かたちは行いつても心こゝろは決けつして遣やるまいと
 極きめて置おいたを、今いま更さらに成なつて何なんの義ぎ理りはり、悪あく人にんでも、いたづらでも構かまひは無ない、
 お氣きに入いらずばお捨すてなされ、捨すてられ、ば結け句く本ほん望まう、あのやうな愚ぐ物ぶつ様さまを良を人に奉まつ
 つて吉よし岡をかさんを袖そでにするやうな考かんがへを、何なぜ故ごとしばらくでも持もつたのであらう、私わたしの命いのちが
 有ある限かぎり、逢あひ通とほしましよ切きれますまい、良を人にんを持もたうと奥おく様さまお出で来きなさらうと此この約やく
 束そくは破やぶるまいと言いふて置おいたを、誰たれが何どのやうに優やさしからうと、有ありがたことい事ことを言いふて
 呉くれやうと、私わたしの良を人にんは吉よし岡をかさんの外ほかには無ないものを、もう何なに事ことも思おもひますまい思おもひ
 ますまいとて頭づ巾きんの上うへから耳みみを押おさへて急いそぎ足あしに五ご六ろく歩ぽかけ出いだせば、胸むねの動どう悸きのいつしか絶た
 えて、心こゝろ靜しづかに氣きの冴さえて色いろなき唇くちびるには冷ひやかなる笑ゑみさへ浮うかかびぬ。(未定稿)

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第二卷」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「新文壇 二號」

1896（明治29）年2月5日

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

※底本の編者による脚注は省略しました。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うらむらさき

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>